

2024/6/2

## ルカの福音書 講解メッセージ⑧

### 『ルカの福音書 4 章 1-20 節 荒野の誘惑』

#### ■悪魔とは

「さて、聖霊に満ちたイエスは、ヨルダンから帰られた。そして御霊に導かれて荒野におり、四十日間、悪魔の試みに会われた。その間何も食わず、その時が終わると、空腹を覚えられた。」(ルカ 4:1-2)

40 日間も断食するというのは、大変なことです。しかし、イエス様は、偉業によって、悪魔の試みと戦ったわけではありません。悪魔の試みは、断食によって戦うものではなく、神のことばによって戦うものです。

聖書の教える「悪魔」とは、固有名詞ではなく、ヘブライ語の「サターン」をギリシャ語「ディアボロス」に訳した言葉で、「敵対者」という意味です。つまり、悪魔とは、神に敵対するもののことです。

神は永遠です。永遠とは、時間が長く延びることではなく、変わらないことです。いつまでも変わらず不動のもの、それが「永遠」であり「真理」です。ですから、神に敵対するとは、真理に敵対することです。つまり、悪魔の実態は、偽りの情報です。すなわち、悪魔と戦うとは、偽りの情報と戦うということです。

「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」(ヨハネ 8:44)

ここで、「あなたがた」と呼ばれているのは、罪人のことです。「罪人は、悪魔から出た者である」とは、どういうことでしょうか。

イエス様は、「罪とはわたしを信じないことである」と言われました。つまり、罪とは、真理を信じないこと、すなわち、偽りの情報を信じることです。そして、偽りの情報は、悪魔から出たものです。

「悪魔は初めから人殺しである」とは、神は愛であり、人を生かしますから、初めから神と正反対の運動をしている悪魔は、人を殺すものだということです。また、神

は真理ですから、初めから真理に立っていない悪魔は、初めから偽りの情報で私たちを殺すものなのです。

悪魔とは神が造った天使が墮落した者だとよく言われることがありますが、そうではありません。イエス様は、悪魔は初めから悪魔だと言っておられます。悪魔が天使から墮落したことの説明に、イザヤ書、エゼキエル書などの御言葉が引用されることがありますが、その解釈は間違っています。もし、天使が墮落して悪魔になったのであれば、イエス様は「初めから」とは言わず、「途中から」と言うはずです。初めから真理に立っていないとは、初めから神に属していないということですから、悪魔は神の被造物ではないのです。

では、神と同様に、初めから悪魔もいたのかという疑問が生まれますが、聖書はそれを否定しています。初めは、神しかおられません。

要するに、悪魔はどこから来たのかという疑問には、「わからない」というしかありません。神はどこから来たのかわからないように、悪魔もどこから来たのかわからないのです。わからないことを追求しようとすると、神はいないとか、輪廻転生とか、空想の迷路に迷い込んでしまいます。哲学者カントは「わからないものはわからないとしなさい」と、その論争に終止符を打ちました。人が経験できないことについては、聖書を信じなさいということです。

私たちの理性のつまずきは信仰です。そもそも私たちの理性では、三位一体を理解することはできません。これを無理やりに理解しようとすると、本来のキリスト教からずれてしまいます。聖書が三位一体を教え、父と子と聖霊を教え、神はお一人だと教えているのだから、信じればよいのです。悪魔は神の被造物ではなく、初めから悪魔だと教えているのだから、それを信じればよいのです。

私たちは、超えてはいけないうちを越えてはいけません。神はヨブに向かって、「あなたは、私が初めを造ったところを知っているのか、わかりもしないのに神にたてつくとは、あなたは何者なのか」と注意なさいました。こうしてヨブは、自分の傲慢に気づいて悔い改めるに至るのです。

私たちは、神を自分の知恵や知識の下に置こうとしてしまいます。それが、バベルの塔を築くということなのです。それは、人がしてはならないことであって、わからないことはわからないまま、素直に聖書のことばを信じれば良いのです。悪魔とは、初めから敵対者であり、どこから来たかわからないけれど、その正体は、偽りの情報を流すものであるということを信じれば良いのです。

聖書には、次のようにあります。

「彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」(ヨハネ 8:44)

## ■偽りの情報はどこから来たか

悪魔の仕業で死が入り込み、この世界は死の世界になりました。この「死」から、偽りの情報は流れてきています。なぜなら、神はいのちであり、死ではないからです。

死があり、死の恐怖がある世界の中での常識は、「行い＝人の価値」です。私たちは人の価値を判断する時に、経歴といううわべを見、互いのうわべを比べ、自分がましかどうかを判断します。すると、自分よりましな人はたくさんいますから、この世界では誰もが自分はだめなものだという思いを刷り込まれます。だから、人は、がんばってうわべをよくして、人から愛される者になろうとします。この世界では、それが正しい生き方だと信じられていて、真理だと思われています。

ところが、聖書が教える真理は違います。あなたは神に似せて造られたものであり、神が愛する者として造ったということです。これが真実です。

ひとりひとりがキリストのからだの器官ですから、ひとりひとり能力が違うのは当たり前です。それは、すべての人が必要だからです。誰が必要であり、大切であり、愛されている、これが真実です。しかし、この世界はその真実を否定します。

そのため、人は皆「自分はだめなもの」という前提に立って生きています。この誤りを修正するのが、悪魔との戦いです。つまり、偽りの情報との戦いです。

正しい情報は、あなたはありのままで神に愛されているということです。そのことを教えるために、イエス様は十字架に架られました。あなたを罰するためにかかったものではありません。

悪魔は巧みに私たちを惑わし、〇〇を手に入れば称賛されると教えます。しかし、イエス様は、「たとえ全世界を手に入れてもいのちを損じたら何になるのか」と言われました。いのちは真実であり、真理であり、神です。神ご自身とつながることが大切なのです。

聖書は私たちに、神と一つになり、神の思いを自分の思いとすることが大切なのか、それとも、この世の人間的標準に従って、人から称賛されることが大切なのか、問いかけています。偽りの情報に惑わされてはいけません。どんなに健康を手にしても、

どんなに称賛を手に入れても、この世の行き着く先は死です。そこから先は、いのちと結びついた者だけが保証されます。つまり、いのちが真理であり、それは、イエス・キリストです。

アダムとエバが蛇に欺かれ、この世界に死が入り込み、その結果、神との関係が壊れてしまいました。つまり、偽りの情報が人を殺すのです。死とは、分離であり、神と異なる思いを信じることです。私たちの中に神と異なる思いが起きるのは、分離が起きているからです。

なぜ神の言葉を信じないことが罪なのか、それは、その結果、イエス様と分離し、死んでしまうからです。この状態を苦しみと言います。つまり、私たちがこの世界で苦しみを覚えるのは、死んでしまっているからです。神でないものを信じることによって、実は苦しんでいるのです。

人は自分の苦しみの原因は、人や環境にあると思っていますが、深く掘り下げて考えてみると、結局は神の約束を信じることができないことが原因です。神のことばではなく、この世界の常識という偽りの情報を信じていることで苦しんでいるのです。つまり、悪魔はいつわりの情報を食べさせることで人を殺すのです。

いつわりの情報を信じれば信じるほど苦しくなるのは、私たちが神によって規定されているからです。それは、永遠なる方によって、神のいのちを貸し出されているということです。私たちの本質は、永遠によって規定されているため、偽りの情報を信じると苦しくなるのです。

人は、死を恐れ、忌み嫌います。それは、生きることを知っているからです。この世には、死の先がないにもかかわらず、死の先に生きることがあると知っています。それなのに、それを信じることができないことが苦しみなのです。

さらに、私たちは神の無条件の愛を知っています。ところが、この世界には変わらない愛がありません。そのために、人との関係で苦しむのです。愛を知っているから、愛されないことに苦しむのです。

さらに、私たちは自由を知っています。ところが、この地上は制約だらけです。そのため、制約に対して反抗します。それは永遠に規定されているからです。神は制約されない方であるため、私たちも制約されないものとして規定されていて、そのためにこの世界に苦しみを覚えるのです。

このように、私たちが覚える苦しみはすべて、神に似せて造られて規定されているにもかかわらず、この惑わしの世界の情報を信じて、神を信じないところにあるのです。この苦しみが私たちと神とを引き離します。これが死です。ですから、悪魔との戦いとは、間違った情報との戦いに尽きるのです。

➤ いつわりの情報の特徴その1:「富による安心を信じさせる」

「そこで、悪魔はイエスに言った。「あなたが神の子なら、この石に、パンになれと言いつけなさい。」」(ルカ 4:3)

この世の中には、どのようにして富を得て、蓄えればいいのかという情報があふれています。しかし、イエス様は、あなたが死んだらその金はどうなるのかと言われます。結局、そんなものは本当の安心ではありません。私たちが求めるべき安心は、神のことばによる安心です。なぜなら、神のことばはいつまでも絶えることがないからです。神のことばを通して生きていく安心を求めましょう。

「イエスは答えられた。『人はパンだけで生きるのではない』と書いてある。」  
(ルカ 4:4)

➤ いつわりの情報その2:「見える評判による安心」

「また、悪魔はイエスを連れて行き、またたくまに世界の国々を全部見せて、こう言った。「この、国々のいっさいの権力と栄光とをあなたに差し上げましょう。それは私に任されているので、私がこれと思う人に差し上げるのです。ですから、もしあなたが私を拝むなら、すべてをあなたのものとしましょう。」  
(ルカ 4:5-7)

権力や栄光は、人からの評判の象徴です。それを手にすると私たちは安心します。この世界で人からの評判を求めるのは、そこに安心があると信じているからです。

また、自分を捨てて人に合わせるのも、人から良く思われて安心を得るためです。この世は、自分を殺して人に合わせるのが、つつましく正しい生き方だとしています。そのため、本音と建前によって、評判を確保しようとするのですが、それは見せかけの安心であって、本当の安心ではないのです。

私たちが求めるべき安心は、人から良く思われることではなく、神と共に生きることの安心です。イエス様は、真理のことばを持って悪魔に対抗しました。真理は神を礼拝することであって、悪魔を礼拝することではありません。神と共に生きることにこそ、喜びと安心があるのです。

「イエスは答えて言われた。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えなさい』と書いてある。」（ルカ 4:8）

➤ いつわりの情報その 3「見える奇跡による安心」

「また、悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の頂に立たせて、こう言った。「あなたが神の子なら、ここから飛び降りなさい。『神は、御使いたちに命じてあなたを守らせる』とも、『あなたの足が石に打ち当たることのないように、彼らの手で、あなたをささえさせる』とも書いてあるからです。」  
(ルカ 4:9-11)

悪魔は、神のことばを使って誘惑を仕掛けてきました。これは、特に、クリスチャンが注意すべき惑わしです。

イエス様が、病人が癒される度に「だまっていなさい」と言われたのは、それが本当の奇跡ではないからです。私たちは、見える奇跡ではなく、本当の奇跡に安らぎを求めなければなりません。それは、死人が生き返ることです。

病気が癒されるのは一時的なことであって、復活ではありません。本当の奇跡は、死んでいたものが生きる者になることです。その奇跡はいつ起こるのでしょうか。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことなく、死からいのちに移っているのです。まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」（ヨハネ 5:24-25）

つまり、キリストを信じている者は、すでに死からいのちに移されていて、永遠のいのちを持っています。これが、真の奇跡です。ところが、多くの人が、これがどれだけすごい奇跡なのかかわかっていません。そのため、見える奇跡に心を奪われがちです。そこで悪魔は、御言葉を使って見える奇跡を求めさせようとします。奇跡こそ神に愛されている証拠だと確認させようとしますが、そんな必要はないのです。放蕩息子の兄は、弟と比べて自分は愛されていないと言いました。しかし、父は、「私はいつもあなたと一緒にいる。私のものは全部お前のものじゃないか。」と言っています。

イエス・キリストはいのちです。いのちは、あなたのものです。あなたは永遠のいのちを持っていて、いつもキリストと共にいます。それが本当の奇跡です。にもかかわらず、あなたは、放蕩息子の兄と同様に、見えるところの祝福を求めてはいないでしょうか。これはクリスチャンに対する警告です。こんなことで、神を試してはいけないとイエス様は言われました。

「するとイエスは答えて言われた。『あなたの神である主を試みてはならない』と言われていた。」（ルカ 4:12）

悪魔と戦うとは、オカルトのようなことではありません。悪魔とは、敵対者であり、偽りの情報を指しているのですから、偽りの情報と戦うための武器は、真理の言葉しかありません。聖書の御言葉を正しく知って蓄えておけば、偽りの情報が舞い込んできても、それを防ぐ盾を身につけることができます。しかし、正しく知らない人は簡単に騙されてしまいます。

イエス様は次のように言われました。

「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。また、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。」（ヨハネ 16:8-9）

この世は、罪と義とさばきについて誤った理解をしていると言われていています。罪とは、真理を信じないことです。ですから、偽りの情報と戦うとは、真理に従う生きかたをすることです。しかし、真理に従って生きるとは、この世界に背を向けることであって、それは苦しみをもたらします。

イエス様は、この地上で王として活動することができたにもかかわらず、貧しい大工の息子として生き、卑しい者とまで蔑まれました。イエス様は、この世の栄光や権力という偽りの情報に背を向け、徹底して真理に従われました。しかし、真理は偽りの情報から嫌われます。そのため、イエス様は迫害され、殺されました。真理に従って生きるとは、それほど厳しいことでもあるのです。

もしあなたがこの世界で苦しんでいるなら、それは正しい生きかたをしているからでもあります。イエス様が心の貧しい者は幸いであると言われたのは、この世界では苦しみを覚えるからです。家族も友達もすべて敵になる、その苦しみの中でイエス様



は十字架に架かり、この世に対して死んだのです。しかし、キリストは死んだだけでなく、天に引き上げられました。ここに希望があります。私たちはこの世界に死ぬことで、真理の世界に引き上げられるのです。

キリスト教は、苦しみを教える宗教です。なぜなら、真理に従えと教えるからです。真理に従って生きようとするキリスト教の歴史は、迫害の歴史です。しかし、その先に真の喜びがあります。これが、聖書が教える悪魔との戦いです。

「誘惑の手を尽くしたあとで、悪魔はしばらくの間イエスから離れた。」

(ルカ 4:13)

悪魔は離れましたが、それは、しばらくの間です。悪魔の攻撃は1回限りのものではないため、私たちは絶えず戦っていなければなりません。

## ■ナザレでのメッセージ

「イエスは御霊の力を帯びてガリラヤに帰られた。すると、その評判が回り一帯に、くまなく広まった。イエスは、彼らの会堂で教え、みなの人にあがめられた。それから、イエスはご自分の育ったナザレに行き、いつものとおり安息日に会堂に入り、朗読しようとして立たれた。すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を見つけられた。「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油をそそがれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕らわれ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」イエスは書を巻き、係りの者に渡してすわられた。会堂にいるみな目の目がイエスに注がれた。イエスは人々にこう言って話し始められた。「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。」(ルカ 4:14-21)

イエス様は、イザヤ書のキリストについての預言の箇所を読み、「今日、この御言葉が実現した」と言われました。つまり、ご自分がキリストであると宣言なさったのです。

ここでのキリストについての預言は4つに区分されています。

### ●「捕らわれ人には赦免を」

イエス様は罪を赦すために来られました。



●「盲人には目の開かれることを」

盲人とは、真理の見ていない人のことです。イエス様は、人々に真理を告げるために来られました。

●「しいたげられている人々を自由に」

イエス様は私たちを死から贖いだし、自由にするために来られました。行いによる自由ではなく、信仰による自由を与えるために来られたのです。

●「主の恵みの年を告げ知らせるために」

イエス様は、宣教を開始される時、神の国は来たと言われました。イエス様は、神の国の到来を告げ知らせるために来られたのです。

「みなイエスをほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いた。そしてまた、「この人は、ヨセフの子ではないか」と彼らは言った。」（ルカ 4:22）

イエス様が、この預言のキリストは私であると宣言されると、それを聞いて、信じる人とつまづく人に分かれました。なぜそのようなことが起きたのでしょうか。

神のことばは、いのちの水です。この水を飲むかどうかは、心が飢え渴いているかどうか、決定的な違いを生みます。イエス様は山上の垂訓の中で、心の貧しい人は幸いであると言われました。

心が飢え渴いているとは、苦しみを知っているということです。苦しみを覚えない人は、神と出会うことはありません。この世に喜びを見出し、この世にどっぷりとつかって生きると、苦しみを覚えません。虚しさや苦しみに気づき始めたら、すぐにそこから逃げて、別の楽しいことを追い求めます。苦しみがあっても、それと向き合おうとしないのです。そういう人は、神と出会えません。

では、どうすれば苦しみと向き合うようになるのでしょうか。私たちは神のいのちによって生かされ、永遠によって規定されているので、死の恐怖があります。愛を知っているので、愛がないことに苦しみを覚えます。自由を知っているので、自由がないことに苦しみを覚えます。誰もがこの苦しみの中にいますから、この苦しみと真に向き合うなら、その人は幸いです。その人は、なんとしても自分が規定されているいのちを手にしたと願うからです。そして、いのちであり真理であるイエス・キリストのことばを受け入れることができるようになるのです。

苦しみに遭う人は幸いです。苦しみこそが神と出会う接点です。自分の知恵や知識で神と出会うことは不可能です。これが神の知恵なのです。神と出会いたいと真剣に

思うなら、心の中の矛盾に目を留め、この世界の安心を求めるのではなく、苦しみや矛盾としっかり向き合うことです。

ただし、たとえ、この世の安心を求めたとしても、そこには罪が生まれ、罪責感が生まれますから、この罪責感に苦しむことを通して、神と出会うことができます。どの道を通ったとしても、苦しみと向き合うチャンスは巡ってきます。

イエス・キリストは、あなたを赦すために来られました。苦しみこそが私たちにとって宝です。キリスト者の生涯は、苦しみを知る生涯です。それは、信仰から信仰に生きる生涯でもあります。